

霧島市地方創生有識者会議(第2回まちづくり合同会議)要旨

開催日時	平成 27 年 8 月 10 日 (月) 13 : 30~17 : 00			
開催場所	国分総合福祉センター 3階 大会議室			
出席者	会議有識者部会	柳研究部会長、木野田研究副部会長、二見委員、上別府委員、大野委員、板元委員		
	専門推進本部	別當部会長(建設政策G長)、三善副部会長(財産活用G長)、八ヶ代委員(防災G長)、西溜委員(中山間地域活性化G長)、宮田委員(共生協働推進G長)、三島委員(道路整備第2G長)、長瀬委員(都市計画G長)		
	事務局	堀切企画政策課長、前田企画政策課主任主事		
	その他	(株)鹿児島経済研究所 眞竹		
公開・一部非公開又は非公開の別		公開	傍聴人数	5人
<p><u>会次第</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 「霧島市人口ビジョン(素案たたき台)」等について 3 「基本目標別(素案たたき台)」について 4 第1回合同会議の振り返りについて 5 意見交換 6 その他 7 閉会 				
<p><u>意見交換の要旨</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 佳例川自治公民館の取組は、過疎地域でいかにして地区住民が元気になるかというひとつのまちづくりのモデルだと思う。何もなかったところだと思っていたが、鹿児島大学の学生やトヨタ車体研究所、国分酒造など、集落の外から見た客観的な意見を頂いたことで、元々あった米と芋などの素材を活かした商品作りを進めることが出来た。最初は1人の芋農家から始まり、国分中央高校にバイオ苗を作ってもらい、焼酎(蔓無源氏)を作った。今では20人の会員で組合を作り、それぞれの売上については、ポイント制にして3分の1は芋部会に収めている。過疎集落等自立再生対策事業を活用して、パンフレット作成などもできるようになった。 ○ 活動を行うにあたっての課題として、地元住民だけでは、商品を作ることはできるが、広く宣伝するのが難しい。うまく国分市街地の企業などを活用して情報発信が出来たらと考えている。どんどん外に出て人的交流を広げ、情報交換を行い、まちづくりに活かしていきたい。 ○ 中山間地域の大きな課題として、空き家の取扱いがある。空き家には、解体すべき危険空き家もあるが、活用できる空き家もある。例えば廃校となった小学校も空き家であるが、民間業者の展示イベントに活用したり、地元を離れた人たちの同窓会の場として開放するなどの活用方法もある。 ○ 校舎とグラウンドを活用して、キャンプ場として活用しても面白い。 ○ 南さつま市の坊では、過疎化が進んで廃校になった地域の小学校を全て公民館にしたと聞いて 				

た。ただの公民館ではなく、バーベキューや宴会、寝泊りができるようにして、地域の人たちが交流できる場として利用されている。現状、民家の空き家については、所有者が貸さないために活用できていない空き家も多い。所有者の意識改革が必要。

- 空き家に対する調査は進んでいると思うが、その調査を基に、今後何に活用するのかを明確にするべきである。ハード面をきれいに整備してもその活用目的がはっきりしていなければ役に立たない。
- シルバー人材センターでは、昔と仕事の層が変わってきている。依頼の多い仕事として庭木の剪定や草払いがあるが、それが出来る年代の方たちが入ってきていないため、今は福祉家事に力を入れている。昔は1市6町で1,200人ほどの登録者があったが、今は募集をしてもあまり集まらず920~930名に減ってきている。減った理由としては、シルバー人材センターでは、月に10日以上は継続して働けないため、経済的にもっと働きたい方が増えたためだと考える。シルバー人材センターの趣旨としては、定年後に第2の人生を楽しみながら、地域社会に貢献することであるため、そもそもたくさん働きたい人にはそぐわない。
- 社会福祉協議会の仕事として、高齢者の安否確認を兼ねた配食サービスを行っているが、人手不足が問題である。地域をまわって感じるのは、お年寄りが外に出ていく機会や場所がないことである。地域の人が集まりやすい場所が欲しい。特に男性のお年寄りは、自ら交流の場を持つのは難しいので、台所が使えるような空き家を利用して、男性向けのお料理教室を開くなどこちらから交流の場を提案してあげることも必要だと思う。
- 認知症の問題については、大人だけでなく子供も認知症に対する勉強を行うことも大事だと思う。普段見かけないお年寄りを大人に通報したことで、徘徊していた認知症老人が発見された例もあったと聞く。消防局が行っている認知症サポーター養成講座に小学生、中学生、高校生も参加させたり、福祉体験学習、高齢者疑似体験など、子供達にもっと高齢者について一緒に学ぶ場を与えてあげたい。
- 認知症対策については、基本的には自治会や地区公民館単位で地域でのネットワークを作り、お互いに気を掛けることが重要である。配布されたアンケート結果の中に「地域との連携が出来ない」という意見があった。行政はいろいろなサポート制度を作っているが、それを住民が知らない、活用できていないことが多い。佳例川の成功例のように、補助制度を活かしたまちづくりもできる。住民がいつ行っても情報がもらえる場が必要である。
- 以前新聞で、溝辺町の物産館でコムス（トヨタの小型電気自動車）を使った高齢者向けの宅配サービスを始めたという記事があった。充電は棚田を利用した簡易水力発電で行っているそうだ。小回りの利く車なので、薩摩川内市では甕島に20台のコムスを導入して、民生委員の方たちが地域巡回などに活用している。
- 国分の市街地で商売をしているが、空き店舗の問題が気になる。昔からの空き店舗を利用して何が出来るか考えていきたい。「空き店舗等活用賑わい創出支援事業補助金」等もあるが、結局補助金が切れると続かない場合が多い。家賃補助は昔からやっているが、成功例が少ない事業は見直しをするべきではないか。市は借りたい人と貸したい人との調整役として、積極的な情報発信などに勤めていただきたい。霧島市には空港があり、県外からの交通の便が良いという利点がある。興味を持った人が気軽に見に来れる環境ではあると思うので、どんどん外部

に情報を発信していくべき。霧島は観光地でもあるので、観光と絡めるなど霧島ならではの側面でのPRをしていただきたい。

- 空き家をそのままにしても自分が経済的に困っていなければ、わざわざ手間を掛けて貸店舗に出すのが面倒という意見も聞く。ただ、空き店舗があると街自体の印象が悪くなってしまふ。空き店舗の所有者に、自分だけではなく町全体の活性化も視野に入れて欲しい。それには行政からの働きかけも必要だと思う。空き家に人が入れば、それに伴い、増改築や流通など新しい仕事も生まれる。しごとの創生という意味でも空き家、空き店舗の活用は重要である。
- 溝辺の物産館よこで〜ろが人気である。農産物を中心とした物産館に加え、語らいの駅に地元商品のギャラリー展示などもある。中山間地域になると、商店の取り扱い商品等にも地域によって偏りがある。規模の大小はあるにしろ、どこに行ってもいろんな業種のお店があり、いろんな商品を手に入れることが出来るのが理想である。
- 地域を盛り上げるといふ点では、今霧島市に住んでいる子供たちに霧島の素晴らしさを伝えていくことも大事である。霧島にはこんなに素晴らしいものがあるということを自ら考え、触れてもらう。霧島の素晴らしいところを知り、将来霧島に留まる子供たちが増えれば、人口減少も防げるのではないか。
- 始良の黒豚料理経営者から、家畜屠殺後の内臓等の不要物を肥料として引き取る業界の方がいると聞いた。シカは害獣であるが、今ジビエ料理等も広まってきている。鳥の胸肉を無添加加工した食品がイスラム圏の人たちに好評であったという話も聞いた。このように、一見不要だと思われるものを新しい産業に結びつけるなど、アイデア次第で無限の可能性があると思う。霧島でも、新しいお金を生むシステムを作っていくことで町の活性化にも繋がる。
- アンケート結果を見ると、いちばん住みやすいと答えた人の割合が多いのは霧島地区であった。霧島からは幹線道路が国分に向かう県道 60 号線と隼人に向かう県道 475 号線があり、国分隼人の市街地に近く、さらに霧島神宮駅もあるという交通の便の良さが関係しているのではないかと思う。まちづくりというと自分の地域だけを考えてしまいがちだが、町と町を繋ぐということも、まちづくりの重要なポイントではないか。アクセス道路がしっかりしたものが出来れば、住みやすいと感じるひとも増えると思う。
- 例えば市が作っている防災マップのように、まちづくりに視点をおいたマップを作ってみてはどうか。集落ごとの人口や、産業、交通情報等を記載して、霧島市全体を見るようにすれば、新たな発見もあるのではないか。アンケートの結果として、今後も住み続けたいという回答は、どの地区を通して高くなっている。実際に住んでいる人が、良い町だと感じているので、その素晴らしい場所を伸ばしていきたい。